

3. 材料試験、残留応力度測定、初期たわみ測定、これらの測定の結果は、表1、表2、図3に示す。

4. 長柱実験、荷重偏心が、発生しない様、推定極限強度の $1/2$ 程度の荷重レベルで、調整用ゲージの値が、5%以内収まる様に、スパーサーで、調整した。

5. 実験結果、箱形断面柱については、残留応力度の影響により、3体とも、局部座圧が、先行するケースとなった。図4～図5で示す様に、局部座圧が、発生した後、若干の荷重増加後、全体座圧が、発生し、全体崩壊にいたった。他箱形断面についての結果は、測定中につき、発表時に、譲るものとする。

6. 結論、

箱形断面：ねじれ座圧とそれに伴う局部座圧が、観察された。

箱形断面：

・局部座圧形状は、軸方向にほぼフランジ中の波長を持ち、2～3波のモードが、柱の中央 近に発生した。

・局部座圧が、先行しその後、全体座圧を起こして、崩壊し

ちび 局部座圧の発生

が、ちびちに、全体の柱の崩壊につながるが、全体座圧は、局部座圧荷重の1.18～1.33倍の荷重レベルで生じた。

7. あとがき、
現在、まだ測定中につき、発表時に詳細な報告をすまうつもりである。

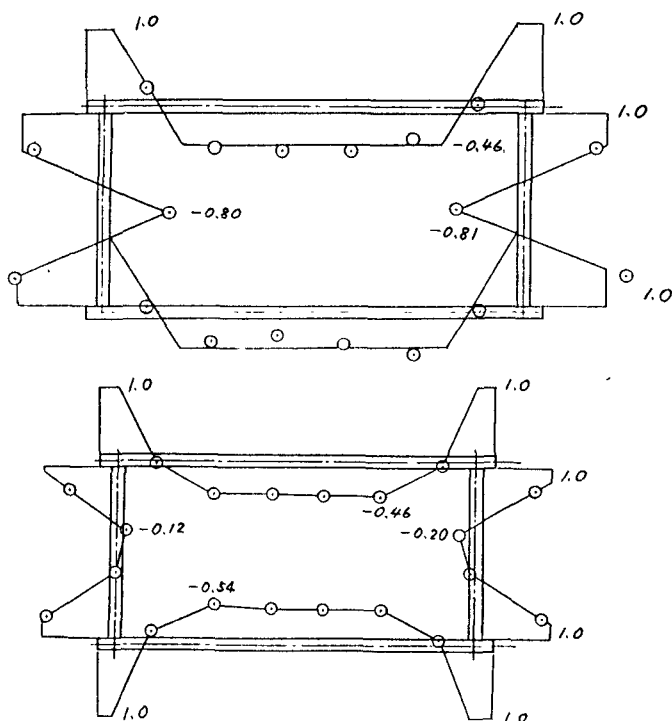


図3. 残留応力度分布図(箱形)

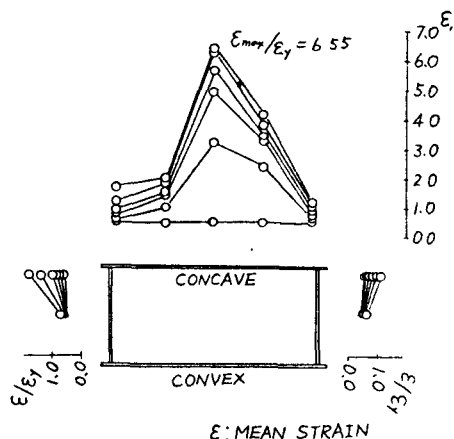


図4. 断面内ひずみ分布

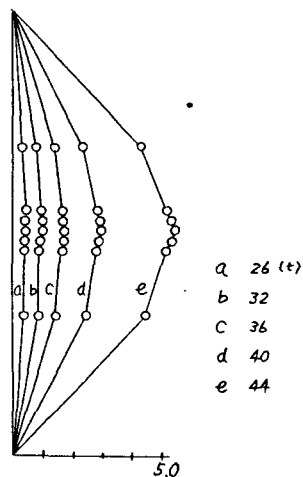


図5 柱としての変位

Box	Local Buckling		Overall Buckling	
	theory	exp.	theory	exp.
A	0.84	0.60	0.83	0.71
B	0.84	0.60	0.84	0.72
C	0.84	0.60	0.85	0.73

他箱形断面柱については 発表時に譲る。

表3. 圧縮強度比較